

国文学研究資料館報

第15号
昭和55年 9月

古典籍総合目録作成事業について

市古貞次

ここにいう古典籍総合目録作成事業とは、国初から慶応三年までに日本人の著わした文献の総合所在目録を作成し、それを維持及び管理する事業である。「日本古典籍総合目録維持管理システム」の作成といつてもよい。日本古典籍の個々について基本的書誌、所在を録したいわば戸籍簿をつくり、それを維持、管理する仕組みを作成することである。すでに同種の事業としては「国書

蔵者の変更、記載事項の誤り等については増補、訂正の要があり、事柄の性質上、将来も常時調査しかつ手当てすることが必要である。この様な事業は取扱う資料の膨大さ、作業過程の複雑さ、多方面にわたる専門的知識の必要等を考えると、到底一個人のなし得るところではなく、古典籍についての各種の専門家の協力のもとに、恒常的に作業に従事し得る機関で行われるべきであろう。さらに大量の資料について常時、増訂の作業を行うため、また資料の効果的な利用——たとえば各種目録（分類目録、文庫別目録等）、索引（人名索引等）の作成——のために、電算機を使用して「古典籍総合目録データベース」を作成する必要があり、

総目録」（全八巻。森末義彰、市古貞次、堤精二編。岩波書店刊。）があり、全国の図書館、文庫の総合目録としておよそ六〇万点の古典籍を収録して学界の利用に供せられている。しかし、同目録に未収録の図書館、文庫、新たに調査された資料、また所

蔵者の変更、記載事項の誤り等については増補、訂正の要があり、事柄の性質上、将来も常時調査しかつ手当てすることが必要である。この様な事業は取扱う資料の膨大さ、作業過程の複雑さ、多方面にわたる専門的知識の必要等を考えると、到底一個人のなし得るところではなく、古典籍についての各種の専門家の協力のもとに、恒常的に作業に従事し得る機関で行われるべきであろう。さらに大量の資料について常時、増訂の作業を行うため、また資料の効果的な利用——たとえば各種目録（分類目録、文庫別目録等）、索引（人名索引等）の作成——のために、電算機を使用して「古典籍総合目録データベース」を作成する必要があり、

次一

古典籍総合目録作成事業について 市古貞次 1

古典籍総合目録の作成について 整理閲覧室 2

データ処理用漢字シソーラスを作成して 田嶋一夫 4

目次

学芸誌・紀要等の利用 上杉省和 6

昭和三十七年以前の国文学関係雑誌

の調査について 情報室 6

名簿、人事異動 8

文献資料部事業報告 大久保正 10

研究情報部事業報告 古川清彦 12

整理閲覧部事業報告 本田康雄 12

利用者へのお知らせ 14

故大久保正教授略歴 實業、市古 15

昭和五十五年秋季学芸会開催一覽 16

そのため電算機を駆使し得る機関であることが望ましい。

国文学研究資料館は設置以来すでに八年、大学の共同利用機関として

国文学に関する文献資料の全国にわたる調査と収集に従事して来た。その成果は当館の『マイクロ資料目録』（三冊。約三万点）に収められている。

この調査と収集とをますます充実させて行くことは言うまでもないが、同時に組織、人員、設備も整いつつある現在、創立以来の経験の上に立って、

館の事業の新しい一つの柱としてこの「古典籍総合目録作成事業」を行いたいと考えている。国文学文献資料の、全国にわたる調査収集計画を立てるにあたって、この「古典籍総合目録」が基本的資料として活用されるであろう。特に今日の国文学

界にあつては、詩歌、小説、演劇その他に関する文献資料のほか、広汎多岐にわたる関連領域（地誌、民俗、芸能、美術等々）についても幾多の文献資料を渉猟しなければならぬ

場合が少なくないが、これらの資料を洩れなく正確迅速に把握するためには、この種の目録の必要が痛感されるのである。

幸い本年より十ヶ年計画でこの事業を実施するための予算が認められたので古典籍総合目録委員会及び館内の専門委員会を設けて検討を始めた。担当は整理閲覧部である。ここにこの事業の開始を斯界に報告し、御協力をお願いする次第である。

日本の古典籍はおよそ千二百余年にわたる歴史をもっているばかりでなく、その数量の多さについても世界にほとんどその比をみない。祖先の残したこのかけがえのない文化財をすべてこの古典籍総合目録に収め、心ある人々の利用に供し、また永く後代に伝えるためのよすがとしたいと考えている。

終りに、古典籍が今日まで保持せられたのは各方面の所蔵者の絶えざる御努力によるところであることを銘記しておきたい。また総合目録作

るためのよすがとしたいと

銘記しておきたい。また総合目録作

成にあたっては、所蔵者——図書館、文庫、杜寺、個人——の作成された蔵書目録の成果を利用するところが

多いことを思い、蔵書目録作成を担当された方々に深謝の意を表したい。(館長)

古典籍総合目録の作成について

整理閲覧室

古典籍総合目録の構想を具体化し、それを実行していくために、整理閲覧室では今年度当初から基本計画や初年次の実施計画を用意し、古典籍総合目録委員会、専門委員会の設置を準備しながら、いくつかの基礎的なファイルづくりの作業を始めた。この計画が実際にどのようなものとなるか、またどの程度まで事が進んでいるかについて関心を寄せていただく向もあるので、まだ基本設計の段階であって、時期尚早かもしれないが、これまで行ってきた作業のうちからこの計画の一面を紹介しておく。

この古典籍総合目録は、岩波書店から刊行された「国書総目録」とほぼ同じような試みである。従って、これが冊子体目録として刊行されれば、「国書総目録」を増補改訂するという体裁をとろうが、両者の基本的ちがいをひとつあげれば、古典籍総合目録のばあいはいわゆるデータベースとして構成されることである。つまり、採録した大量データの多様な利用を可能にし、また将来的にもこの目録を維持、管理するシステムを保守していくという考え方に立った電算機処理によるのである。

今、「国書総目録」の項目記入の構造の分析と現在進行中の古典籍データベースの設計のメモから、それぞれ図示したものを対照してみよう。

図(1)「国書総目録」の記入の構造と図(2)古典籍総合目録データ・ファイル関連図である。ただし、この両図はレベルを異にしているから直接的に対応し合うわけではない。つまり、古典籍総合目録のばあい、データベースの構造であって、「国書総目録」にあたる冊子体目録は、それからえられる産出物のひとつにすぎないという関係だからである。しかし逆にいえば、この両者の対応とそのへだたりが、古典籍総合目録のあり方を表象していると思うのである。

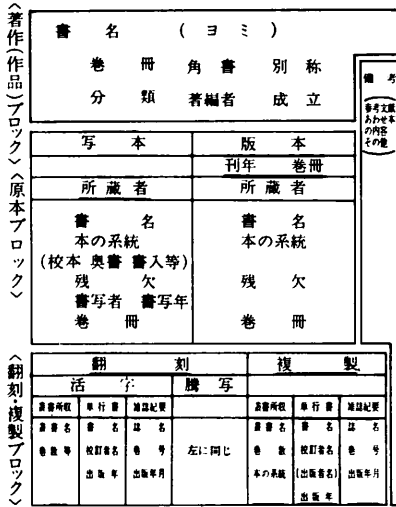
ともあれ、まず図(1)をみてみよう。「国書総目録」ではおのおの書名ごとに記入が構成されている。いわゆる著作(作品)のレベルの把握である。このレベルで構成されるへ著作ブロックには書名のほか著編者などひとつの著作を識別するための事項が収められている。そのもとには、それぞれの所載される図書(原本)が写本と版本や所蔵者の区別のもとに表示されている。この(原本ブロック)にも書誌事項としては、書名(『記載題等)や本の系統、巻冊などを含んでいる。また、所蔵情報を持たないが、翻刻と複製の記載のブロックがある。そのうちあるものは(原本ブロック)のレベルへの関連の明らかなものもあるが全体として著作の単位に組みこまれている。もうひとつ別に備考を記載するブロックがあり、その内容は記入全体にわたっている。つまりは「国書総目録」のばあい、ある著作(作品)のどのような原本がどこにあるか、またその翻刻本、複製本はどのように刊行さ

れたかを知るのに、最も適合するようなコンパクトな記入構造をとっているわけである。

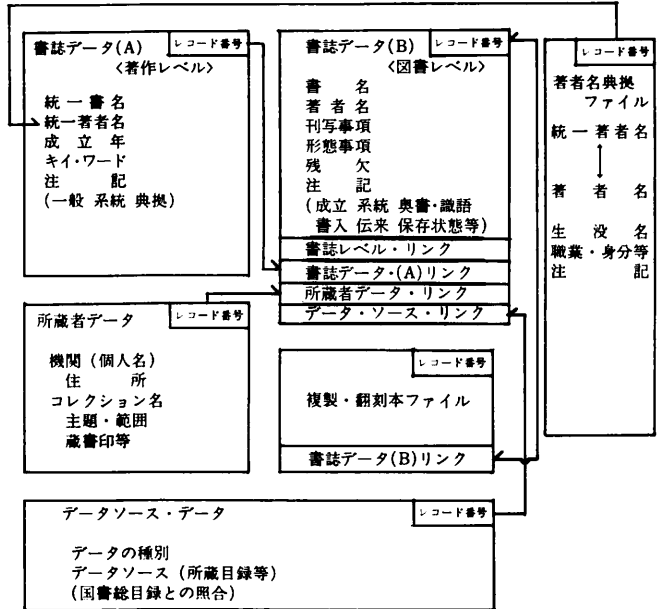
古典籍データベースをそれと較べてみると書誌データ(A)のデータ・ファイルは、「国書総目録」の(へ著作ブロック)の記述にはほぼ一致しており、「国書総目録」でいう原本のレベルのブロックは、ここでは書誌データ(B)と所蔵者データとを合せたものと対応する。複製、翻刻本ファイルもまた双方に照応するであろう。さらに「著者別索引」を作成するためには、別に作成している著者名典拠ファイルを使えばよい。結局、図を相互に対応させていくと、「国書総目録」には、古典籍総合目録データベースにみられるデータソース・データ・ファイルが欠けている以外、枠組として大きな異同はないようである。

しかしながら(へブロック)とデータ・ファイルとは実は、全くちがった容れ物であること(データ・ファイルは、容れ物が機械可読なファイルであり、またそれぞれのデータの性質に応じていくつかのファイルにわけられているとともにそれらが相互に統合され関連し合う構成にあるという2点)を想起して欲しい。例

図(1) 『図書総目録』の記入の構造



図(2) 古典籍総合目録データ・ファイル関連図



かえればそうした利用を前提とするから、データ項目も『国書総目録』とは異って、かなりその数も多く、直接的には関連しないものさえ入っているのである。さらにまた、『国書総目録』とは対応しなかったデータソース・データのファイルとは、どこからデータを採集したかというデータであるが、これはふたつの意味がある。ひとつは、この事業は第一義的には、図書館や文庫等の所蔵目

えば、書誌データ(A)というデータ・ファイルから発して、書誌データ(B)や所蔵データの中のデータ項目を関連づけ、国書総目録と同じものをつくることができようが、同時に各データ・ファイル自体も、いうならば古典籍の書誌目録であったり、所蔵者またはコレクションのディレクトリーであったりする。あるいはデータを取り扱う視点や、データ項目の組み合わせでさまざまな利用をも可能となるわけである。いい

録からデータを集めるから、それを把握しておき、データの信頼性をそれなりに保持すること(その副産物としては『目録の目録』ができる)とこのシステムの維持、管理のためこうした記録を保持していくことである。

図(1)は、『国書総目録』のいわば「分析」した図解であるのに、図(2)はすでにそれと照応する内容がデータベースとして構成されているという対比であったが、およそ古典籍総合目録の企画の輪郭をたどることができたと思う。本来は、この企画にとつての作業基準とか収録すべき項目をとりあげ、そのとり扱い方を検討した過程を語るべきであったかもしれないが、データベースというあり方がその結論であったことをいい添えておく。

現在、これらのデータ・ファイルのうち、所蔵者データ・ファイルの設計を終え、データの作成に入っている。また書誌データについても、おそらく七月中には設計を終え、データ採録に入る予定である。今回は言及しなかった著者名典拠ファイルなどの作業も別に進捗しているが、まずはこのあたりがこの事業の主たる側面である。(水田治樹 山城玲子)

データ処理用漢字シソーラスを作成して

田嶋 一夫

一、はじめに

漢字情報処理システムを運営していく上で、最も重要な課題は、あらたに発生してくるシステム外字をいかに内字化して、運用上支障なく使用できるようにするか、であろう。同時に無駄な漢字の増加を抑え、本来に必要な漢字だけを使用していくことも重要な問題である。言うまでもなく無制限に漢字の字種を増加させていくことは、日常の運用においても、漢字を管理するという点からも問題が多く絶対避けなければならない。この観点から当館のシステムでは、漢字辞書を作成して管理運用している。この漢字辞書では、システムで使用する漢字のフォント情報（漢字の形を規定し登録したもの）と、属性情報（個々の漢字の読み、部首、漢和辞典の番号等のフォントに対するインデックス情報）をファイル化し、コンピュータ上に登録するとともに、冊子体の漢字辞書及びその索引を作成している。これにより新規の漢字（システムに未登録の

漢字）が、出現したときに、この辞書により検索し、登録の可否を検討している。しかしこの辞書の利用だけでは、新規の漢字が、既登録の漢字と関係があるのか、あるとすればどのような関係があるのか、登録しないとすれば、どの漢字で代用できるか、等の問題をそのつど検討しなければならぬ。この検討は迅速にかつ確実に行なわなければ、校正や出力処理等の運用上のロスが大きくなるのである。

以上のような状況の中で、作成したものが漢字シソーラスである。つまりここで言う漢字シソーラスとは、個々の漢字を対象として、同義またはそれに近い関連を有する漢字をグループビングし、漢字相互の関連を階層的に表現した漢字辞書である。

二、漢字シソーラスの内容

このシソーラスは、デイスクリプタ（代表漢字）と、非デイスクリプタ（代表漢字に対して同義、類語の関係にある漢字）と、関連字（部分的に同義の意を含むものや、時によ

り通義の漢字として使われるもの）から構成されている。ここでデイスクリプタと認定したものを正体とすれば、非デイスクリプタはその異体と見做すこともできる。非デイスクリプタの部分は、次の八つに細分している。

- (1) 本字||正字形として承認されているもの、またそのなりたちから考えて、正字形とすべきもの。
- (2) 古字||周金文、説文解字所載の古文、楷文、大篆を楷書形に改めたもの。
- (3) 別体字||そのなりたちから考えて、異つたしくみを持つが、同音同義の字とすべきもの。また「惑体」を含む。
- (4) 俗字||本体がくづれた形で通用しているもの。
- (5) 講字||部分的に通用しているが、誤つた字形であつて使用の望ましくないもの。
- (6) 同字||「大漢和」において、同字または「亦一に作る」「一に同じ」に類することばで説明さ

れているもの。

- (7) 旧字||当用漢字とそのままになつたと思われる漢字の間で、形態上違いがあり、その関係が上述の(1)~(6)でない場合のもの。
- (8) 簡略字||中国で使われている簡化文字。

三、対象漢字の範囲

デイスクリプタについては、当館の漢字辞書に収録されている漢字が対象である。当館漢字辞書とは、JISの漢字（情報交換用漢字符号系として、一九七八年に制定されたもの）六三九九字に、当館独自の漢字（データ作成当時二一八字）を加えたものである。この中から、主に「新字源」及び「大漢和」の記述を根拠として、抽出したものである。非デイスクリプタ及び関連字は、「新字源」、「大漢和」JISの中にあり、かつ当館漢字辞書に登録されている漢字と何らかの関連をもつ漢字である。

あくまでも当館システムで現に使用している漢字を中心として、この中からデイスクリプタを抽出し、その同義や関連の漢字を辞書の中から抽出し整理したものである。またデイスクリプタの認定にあつては、旧字の定義からも類推できるように、

当用漢字等の字体がある場合には、それをディスクリプタとして整理したのではない。また本字を必ずしもディスクリプタとしたものでもない。例一にシソーラスの一例を示す。

四、漢字シソーラスの分析

これを分析してみると、表1のような結果を得る。これは、六五三六の漢字に対し、五九三六の漢字が非ディスクリプタとして存在することを意味している。つまり一つの概念を表現する漢字が平均一、九字存在していることを意味している。これは非ディスクリプタをディスクリプタに統一して表記して良いと考えれば、仮にデータ中に二五〇三の漢字字種があらわれたとしても、六五三七の漢字で表記できるであろうことを意味している。このことは漢字がいかにバリエーションを多く発生させているか、また表記体系として複雑になっているかを示しているであろう。

五、漢字シソーラスの活用

現在は新出の漢字の登録の決定に際して、他の同義の漢字があるかどうか、登録の必然性があるか等の検討資料として使用しているが、将来

においては検索ツールの一つとして活用できるであろう。漢字データベースの検索システムでは、漢字コードの異った同義の漢字を統一的にサーチするためには、検索語の中に漢字表記のバリエーションを加え、検索語を表記ごとに指定しなければならぬといった問題が生ずると思われる。このシソーラスを検索システムの中に、ファイルとして組み込むことによって、複数表記の指定が必要なくなり、検索効率の向上につながるであろう。また検索システムのみならず、索引やキーワードリスト等の漢字データの出力に関しても、同義漢字の統一的な排列が可能となる。

六、今後の課題

タイトルに試作版と付したように、未だ完全なものではない。主として『大漢和』の指示にしたがって漢字を整理しているのであるが、同辞典には指示もれと思われるものも見うけられるので、参照するデータの見直しを行い、より完璧なものにしなければならぬ。また個人的なレベルではなしうるものではないが、漢字全体に及ぶシソーラスを作成すべきであろう。これにより漢字の字体を管理し、字体を統一的に使用して

例1 漢字シソーラスの一例

- 【弁】 当 (ベン、かんむり、わかる、はなびら、パン)
 CADB (2244) [09588]
 本字 - [辨] D2A1(2248) [38656]
 古字 - [𪛗] [09618]
 旧字 - [𪛗] EDE7(2247) [00000]
 旧字 - [𪛗] E1A2(2246) [21425]
 旧字 - [辨] D1FE(2245) [38657]
 ★
 関連字 - [] [07497]
 [] [11966]
 [] [19903]
 [] [11360]
 [] [38644]
 [變] DACE(3202) [36117]
 [采] C8D0(A00F) [40115]
 [譚] EBE6(7704) [35703]
 [] [35520]
 [] [03955]
 [平] CABF(2150) [09167]
 [般] C8CC(6645) [30388]
 [𪛗] D2C6(0835) [02778]
 [] [38677]
 [分] CAAC(0598) [01853]
 [別] CACC(0615) [01924]
 [𪛗] F7C1(8348) [10174]
 (注) () は「新字源」 [𪛗] C8C9(4903) [20976]
 () は「大漢和辞典」 [𪛗] CAD8(0269) [00659]
 の番号を示す。 [𪛗] ECCA(7883) [36707]

表-1 非ディスクリプタの数 ディスクリプタ候補漢字 6567
 データ整備状況1980.1.10現在

	トータル	内 訳		
		JIS第1	JIS第2	JIS外
本字	744	6	52	686
古字	1,435	6	20	1,409
別体字	521	16	81	424
俗字	722	70	164	488
講字	51	6	9	36
同字	1,624	35	70	1,519
旧字	834	10	256	568
簡略字	5	0	0	5
合計	5,936	149	652	5,135

(情報処理室)

いくことが、漢字システムとして何よりも必要なことであろう。
 漢字システムが、いいかげんな漢字フォントを作成し、使用することから、それが広く使われるようになって、あらたな異体字を増加させるという愚だけは、絶対に避けたいものである。
 ※漢字情報処理システムの中で使用できるようになっていない漢字。
 ※「データ処理システムの為の漢字シソーラス(試作版)」として、ごく少数部数印刷した。

学会誌・紀要等の利用

上杉 省和

昨年度下半期、内地研究員として、国文学研究資料館での研究生活を送る機会を与えられた。周知のように、国文学研究資料館は、主にわが国古典文学の貴重な資料をマイクロフィルムとして収集したり、全国の大学の国文学関係の学会誌、紀要等を体系的に収集して、その情報提供に重要な役割りを果たしている。ところで、学会誌、紀要等に発表される研究論文のうち、近代文学に関するものはその過半を占める、といってもよい程であるから、我々近代文学の研究に携わる者にとって、国文学研究資料館は誠にありがたい、心強い存在である。私の勤務する大学の図書館、研究室にも各大学から学会誌、紀要が送られてはくるが、それらは全体の何割にも満たないし、送られてくるものについても、時に気まぐれで、バックナムバーの完備には程遠いのが実情である。日頃から読みたくても手に入らなかった学会誌、紀要等に掲載された論文を、私は国文学研究資料館の書庫に見出して、幾度も溜飲の下がる思いを味わった。それらはコピーされて、今後の私の研究

の糧となってくれる筈である。毎年国文学研究資料館から発行される『国文学年鑑』を手がかりに、今後とも同資料館の活用は欠かせないものとなる。たゞし、資料館は創設されて十年とまだ日も浅く、学会誌、紀要等の収集もまだ不十分である。殊に資料館創設以前のものについては、今後共、精力的にバックナムバーの収集にあたって欲しいし、各大学もこれに協力すべきであろう。私の希望としては、学会誌・紀要に限らず、全国各地の同人誌の収集にもあたって欲しい、と思っている。同人誌には、時に重要な作品、研究論文が発表されるが、最も入手困難であるからである。また、今日では稀少価値となった明治開化期の戯作の類、啓蒙書、翻訳書等の収集にもあたって欲しい、と思っている。日本近代文学館と並んで、国文学研究資料館が国文学研究者の要求に答える情報センターとして、更に充実・発展することを切望している。

(静岡大学人文学部助教)

昭和三十七年以前の

国文学関係雑誌の調査について

毎年五千点を越す雑誌論文や数百の単行本の検索のために、当館では、昭和四十六年から毎年『国文学年鑑』(昭和四十六年から五十一年までは『国文学研究文献目録』)を発行して研究者の便に供している。それ以前、昭和三十八年から四十五年までの八年間は、東京大学国語国文学会の編集による『国語国文学研究文献目録』が発行されていた。(注1)

そこで当館では、昭和五十四年度から五カ年計画で、昭和三十七年以前の研究文献目録を作成する事業に着手し、第一段階として昭和五十四年度は、三十七年以前に出版された国語国文学関係雑誌のバックナンバーの調査を行った。

しかし、昭和三十七年以前の研究論文を収録した目録は、表(1)のものがあるが、最近出版された一般的な雑誌記事索引累積版を除けば、既に入手が困難であるなど、その利用に制約があり、三十八年以降の研究文献目録や年鑑に相当する利用し易いものが欠けていた。このため、簡単に手に入り、容易に検索できる昭和三十七年以前の文献目録が作られることが、かねて要望されており、当館の開館に当って、研究者の間から、その実現に対する強い期待が寄せられていた。(注2)

戦後、昭和三十八年までの期間は、現在国語国文学会連絡協議会に参加している二十四学会のほとんどが創設された時期であり、(表2参照)、また一般的にも、この時期は、新制大学および大学院制度が確立され、戦後の教育を受けた新しい研究者が育ちはじめるまでの、大学の転換期に当たっている。

したがって大学の紀要類、学内学会誌等も続々この期間に創刊されている。

今回の調査では、昭和二十一年から三十七年の間に発行されたものを中心に、おいたが、調査全体としては全ての国語国文学関係雑誌のバックナンバーを対象とした。この調査の参考資

料として、表(1)の目録類をはじめ、文部省大学学術局編「学術雑誌総合目録」、「国語と国文学」各号の彙報欄を利用した。

これらのものから採り出した雑誌のうち、出版社等から市販されていたと考えられるもの約百三十種については、購入の方向で収集することとし、学会や大学が発行している市販されていない雑誌については、それぞれの発行者に、次の各項目の照会を行った。

表1 昭和37年以前を対象とした国文学文献索引

名称	刊年	編者発行所 又は掲載雑誌名	採録範囲	収録論文数 (約)
(A) 国語国文研究雑誌索引	昭4年8月	国語国文の研究	明治初期	
"	昭8年7月	国語国文	-	1,500
"	昭10年8月	"	昭和6年	
(B) 国語国文学年鑑	昭14年11月	久松潜一編 瑞文社	昭和13年全	3,500
"	昭16年5月	"	昭和14年全	"
"	昭18年11月	"	昭和15年全	1,500
(C) 文学・国語・史学文庫目録1 日本文学誌	昭 27	日本学術会議	昭和20年~昭和25年	5,000
(D) 国語国文学論文目録	昭 29	森島貞徳編 瑞文堂	昭和20~昭和28	1,500
(C) 文藝系文庫目録 -日本文学誌-	昭 44	日本学術会議編	昭和26年~昭和29年	5,000
(E) 日本文学研究年報	昭和32 ~昭和54	昭和女子大学児童会編 瑞文社	昭和32~昭和54	1,000
(F) 全国大学機関誌 国語国文学論文目録(1)	昭 42	昭和女子大学自治的全国研部	昭和25年頃~昭和41	3,500
(G) 雑誌記事索引情報版 文学語学	昭和23 ~29	昭 54	昭 23 ~ 昭 29	20,000
雑誌記事索引情報版 文学語学	昭和30 ~39	昭 52	昭 30 ~ 昭 39	23,000

(ア)発行巻号の確認、(イ)在庫の有無、(ウ)在庫のある場合の入手方法、(エ)在庫のない場合の複写入手の許可。

その結果、「国文学年鑑」の学会一覧所載の、全国的な、分野別三五学会については、各学会の御協力により、すべてのバックナンバー(一部複写を含む)を整備することができた。

また大学内学会誌、紀要等については、次のような回答を得た。

照会数 六五六件

現在これらの情報にもとづいて、寄贈の受入れや、在庫がなく複写を許可されたものについての複写の整備が、国立国会図書館等の御協力のもとに、整理閲覧部において鋭意進められている。

国文学研究資料館は設置以来、国文学に関する学術雑誌の収集を事業の一つの柱として、整理閲覧部が担当して実施してきており、現在、当館の「逐次刊行物目録一九八〇年」に収録されている一九七九誌が利用に供されている。このうち昭和三十七年以前のものは、五五七件、一〇八三四冊(製本前の号単位)に達している。

(注1) 「国文学年鑑について」
国文学研究資料館報13号、
昭和54年

回答数 五八二件
(内)在庫有り 二九三件
在庫ナシ 二五一件
他の書名と重複 三八件
照会以外の報告 三三件

表2 国語国文学会連絡協議会参加学会創設年表

昭和年	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45	46	47	48	49	50	51	52
月	6	10	6	7	10	1	10	1	12	5	5	6	12	1	1	1	4	7	11	12	11											5	
(注)昭和14・4美夫君志会設立	日本文学協会設立	国語学会(国語学)発行設立19年)	日本漢学研究会設立	国語学会(国語学)発行設立19年)	日本漢学研究会設立	国語学会(国語学)発行設立19年)	日本漢学研究会設立	国語学会(国語学)発行設立19年)	日本漢学研究会設立	国語学会(国語学)発行設立19年)	日本漢学研究会設立	国語学会(国語学)発行設立19年)	日本漢学研究会設立	国語学会(国語学)発行設立19年)	日本漢学研究会設立	国語学会(国語学)発行設立19年)	日本漢学研究会設立	国語学会(国語学)発行設立19年)	日本漢学研究会設立	国語学会(国語学)発行設立19年)	日本漢学研究会設立	国語学会(国語学)発行設立19年)	日本漢学研究会設立	国語学会(国語学)発行設立19年)	日本漢学研究会設立	国語学会(国語学)発行設立19年)	日本漢学研究会設立	国語学会(国語学)発行設立19年)	日本漢学研究会設立	国語学会(国語学)発行設立19年)	日本漢学研究会設立	国語学会(国語学)発行設立19年)	

(注2) 久保田淳「終戦後の国文学における文献目録の谷間」国文学研究資料館報8号 昭和52年 (情報室)

国文学研究資料館評議員名簿

任期昭和五十五年七月一日、昭和五十七年六月三十一日

- 阿部秋生 実践女子大学文学部長 東京大学名誉教授
 - 石井良助 創価大学法学部教授 東京大学名誉教授
 - 伊地知鐵男 元早稲田大学文学部教授
 - 臼田基五郎 国学院大学文学部教授
 - 小田切進 立教大学文学部教授 日本近代文学館理事長
 - 久曾神昇 愛知大学長 愛知大学理事長
 - 児玉幸多 学習院大学名誉教授
 - 小葉田淳 京都大学名誉教授
 - 小林清治 福岡大学教育学部教授
 - 齋藤正 東京国立博物館長
 - 佐藤喜代治 フェリス女学院大学文学部教授 東北大学名誉教授
 - 谷山茂 京都市立大学長
 - 手塚富雄 共立女子大学文学部教授 東京大学名誉教授
 - 野間光辰 皇学館大学文学部教授 京都大学名誉教授
 - 秀村選三 九州大学経済学部教授
 - 古島敏雄 専修大学図書館長 東京大学名誉教授
 - 宝月圭吾 東京大学名誉教授
 - 松尾聰 学習院大学名誉教授
 - 松田智雄 図書館情報大学長 図書館短期大学長 東京大学名誉教授
 - 山本達郎 国際基督教大学大学院教授 東京大学名誉教授
- 昭和五十五年度**
国文学資料館集計面委員会委員
 任期 昭和五十五年四月一日、昭和五十六年三月三十一日
- 井上宗雄 立教大学文学部教授
 - 今枝愛真 東京大学史料編さん所教授
 - 尾上兼英 東京大学東洋文化研究所教授
 - 木藤才藏 日本女子大学文学部教授
 - 信多純一 大阪大学文学部助教授
 - 角田一郎 帝京大学文学部教授
 - 永積安明 青山学院大学文学部教授
 - 野田寿雄 愛知教育大学教育学部教授
 - 樋口芳麻呂 愛知教育大学教育学部教授
 - 宮次男 東京国立文化財研究所美術部第一研究室長

昭和五十五年度 文献目録委員会委員

任期 昭和五十五年四月一日、昭和五十六年三月三十一日

- 浅井清 お茶の水女子大学文教育学部教授
 - 大矢武師 静岡大学教育学部教授
 - 久保田淳 東京大学文学部助教授
 - 藤原昭二 東京大学教養学部助教授
 - 杉本邦子 昭和女子大学文学部助教授
 - 瀬戸仁 神奈川県立七里ヶ浜高等学校長
 - 會曾岑 青山学院大学文学部教授
 - 浜野卓也 山口明德 東京大学文学部助教授
- 昭和五十五年度**
情報検索委員会委員
 任期 昭和五十五年四月一日、昭和五十六年三月三十一日
- 石綿敏雄 城茨城大学教養部教授
 - 稲岡耕二 東京大学教養学部教授
 - 桜井宣隆 図書館短期大学教授
 - 西村恕彦 東京農工大学工学部教授
 - 堀内秀晃 東京医科歯科大学教養部教授
 - 水谷静夫 東京女子大学文理学部教授
 - 山本毅雄 東京大学大型計算機センター助教授
- 昭和五十五年度**
国文学資料館調査員
 任期 昭和五十五年四月一日、昭和五十六年三月三十一日
- (北海道・東北)
 - 片野達郎 東北大学教養部教授
 - 金沢規雄 宮城教育大学教育学部教授
 - 上岡勇司 北海道教育大学教育学部助教授
 - 菊地仁 山形大学人文学部講師
 - 佐々木久春 秋田大学教育学部助教授
 - 新藤協三 山形大学教育学部助教授
 - 丸山茂 弘前学院大学文学部教授
 - (関東)
 - 池田和臣 茨城大学人文学部講師
 - 石川了 大妻女子大学文学部講師

磯水絵 二松学舎大学文学部講師

- 岩下紀之 鷗友学園女子高等学校教諭
- 宇田敏彦 戸板女子短期大学助教授
- 上参郷祐康 武蔵野音楽大学助教授
- 川平均 跡見学園女子大学文学部講師
- 小島孝之 立教大学文学部助教授
- 近藤瑞男 共立女子大学文芸学部講師
- 杉谷寿郎 日本大学文学部教授
- 杉山重行 日本大学経済学部講師
- 鈴木淳 国学院大学日本文化研究所研究員
- 諏訪春雄 学習院大学文学部教授
- 徳田武 明治大学法学部助教授
- 中野沙恵 東京女子医科大学講師
- 中山右尚 共立女子短期大学助教授
- 成田守 大東文化大学文学部助教授
- 萩原恭男 大東文化大学文学部助教授
- 原道生 横浜市立大学文学部助教授
- 牧野和夫 東横学園女子短期大学講師
- 松尾春江 東京女子短期大学講師
- 三角洋一 百合女子大学文学部助教授
- 宮本瑞夫 立教女子短期大学助教授
- 渡辺秀夫 東横学園女子短期大学講師
- (中部)
- 安藤重和 愛知教育大学教育学部助教授
- 岡本勝 愛知教育大学教育学部助教授
- 嘉藤久美子 桜山学園大学講師(非)
- 木越治 富山大学教養部助教授
- 久保木哲夫 都留文科大学文学部教授
- 杉戸清彬 桜山学園大学文学部講師
- 須田悦生 静岡女子短期大学助教授
- 田中新一 愛知教育大学教育学部教授
- 棚町知弥 長岡技術科学大学工学部教授
- 西村聡 皇学館大学文学部助手
- 橋本朝生 山梨大学教育学部助教授
- 服部幸造 福井大学教育学部助教授
- 服部仁 同朋大学文学部講師
- 三保サト子 福井大学教育学部助教授
- 宮崎莊平 新潟大学法文学部教授

室木彌太郎 金沢大学教養部教授

大槻 修 甲南女子大学文学部教授

加納重文 京都女子大学文学部助教授

阪口弘之 大阪市立大学文学部講師

長坂成行 奈良大学文学部講師

林省之助 関西大学文学部助教授

肥田皓三 関西大学文学部講師(非)

堀口康生 大阪女子大学講師

増田繁夫 大阪市立大学文学部助教授

松原秀江 姫路短期大学助教授

三村晃功 花田大学文学部助教授

山本登朗 光華女子大学文学部講師

芦田耕一 鳥根大学法文学部講師

糸井通浩 愛媛大学法文学部助教授

稲葉二柄 香川大学教育学部助教授

熊本守雄 山口女子大学文学部助教授

檀上正孝 広島大学教育学部助教授

松原秀明 金刀比羅宮図書館嘱託

山崎 誠 広島女子大学文学部講師

弓削 繁 山口大学教養部助教授

渡邊輝道 高知大学人文学部助教授

荒木 尚 熊本大学文学部教授

小川幸三 熊本短期大学講師

重松裕己 熊本女子大学文学部教授

白石一美 宮崎大学教育学部講師

中野三敏 九州大学文学部助教授

原岡秀人 佐賀龍谷短期大学教授

米倉利昭 佐賀大学教育学部教授

〔文献資料特別調査員〕

小川要一

野口元大 文部省初等中等教育局主任教科書調査官

延廣眞治 東京大学教養学部助教授

長谷川 強 埼玉大学教養部教授

横井金男 香川県立短期大学教授

横山邦治 広島文教女子大学文学部教授

昭和五十五年度 国際日本文学研究会委員会委員

任期 昭和五十五年四月一日〜昭和五十六年三月三十一日

池田 重 千葉大学教育学部教授

井本農一 聖心女子大学文学部教授

臼田甚五郎 国学院大学文学部教授

長谷川 泉 学習院大学講師(非)

ドナルド・キーン コロンビア大学教授

昭和五十五年度 共同研究委員会委員

任期 昭和五十五年四月一日〜昭和五十六年三月三十一日

秋山 虔 東京大学文学部教授

稲賀敏二 広島大学文学部教授

神保五彌 早稲田大学文学部教授

田中 裕 大阪大学文学部教授

松崎 仁 立教大学文学部教授

昭和五十五年度 古典籍総合目録委員会委員

任期 昭和五十五年六月一日〜昭和五十六年三月三十一日

菊地勇次郎 東京大学史料編纂所所長

堤 精二 お茶の水女子大学文教育学部教授

昭和五十五年度 共同研究員

任期 昭和五十五年四月一日〜昭和五十六年三月三十一日

池田俊朗 京北高等学校教諭

尾形 仂 成城大学文芸学部教授

加藤定彦 立教大学一般教育学部助教授

雲英末雄 早稲田大学文学部助教授

久保田 淳 東京大学文学部助教授

谷地快一 東洋大学附属牛久高等學校教諭

中野沙恵 東京女子医科大学講師

三輪正胤 大阪府立大学総合科学部助教授

森川 昭 東京大学文学部助教授

※各委員会等の館内委員は省略

人事異動

(採用) 昭和五十五年三月〜昭和五十五年七月

文部教官(文献資料部助手) 小林 健二

文部教官(研究情報部助手) 平澤 龍介

(転入) 昭和五十五年四月一日付

管理部庶務課長 林 昇

(富士大学より)

管理部会計課長 内山日出男

(群馬大学より)

(転出) 昭和五十五年四月一日付

文部教官(研究情報部助手) 和田 博通

(山梨大学へ出向)

管理部庶務課長 下重 孝之

(電気通信大学へ出向)

管理部会計課長 柴田 一男

(一橋大学へ出向)

(辞職) 昭和五十五年三月三十一日付

文部教官(文献資料部助手) 徳田 和夫

(学習院女子短期大学、就職)

(客員教授) 昭和五十五年四月一日〜昭和五十六年三月三十一日

文献資料部 松崎 仁

(併任) 昭和五十五年四月一日付

文部教官(文献資料部助教授) 眞鍋 昌弘

(奈良教育大学より)

文献資料部事業報告 大久保 正

当部に課せられた最大の任務は、国文学に関する文献その他の資料の調査研究、及びその収集を行うことであり、昭和四十七年発足以来、当部ではこの原点の上に立って事業を進めてきた。そして種々の困難な条件にもかかわらず、昭和五十四年度も、関係各位のご協力により、書誌調査点数七千四點、マイクロフィルム資料収集点数五千六百九十九點、一四三六リールと所期の目標を達成することができた。しかしながら、本年度以降、さらにその調査・収集個所を拡大し、学術的価値の高い文献資料の調査・収集を強化して行くためには、予算上のきびしい制約をはじめ、種々の困難な問題が横たわっている。それを克服するためには、

当館設立の趣旨・目的に対し、関係各位のいっそうの御理解と御協力を期待する以外に方途はない。ここに、当館発足以来、多大の御援助をいただいた図書館・博物館・文庫等所蔵者各位に厚く御礼申し上げると共に、関係各位のいっそうの御理解と御協力を願う次第である。

恒例により、昭和五十五年二月一

日以降、同年六月末日までに当部で行った事業について報告する。

昭和五十四年度第二回国文学文献資料収集計画委員会の開催

二月二十二日、当館中会議室において開催、まず、委員長より中田剛直委員が本年一月二十一日逝去されたことが報告され、一同黙悼を捧げた後議事に入った。議事は左の通りである。

(一)昭和五十四年度文献資料調査収集概況について
 当年の文献資料調査点数は二月現在当初の目標である七千点に達していないが、現在も文献資料調査員の協力を得て調査を続行中であり、目標達成に努力する所存であること、マイクロフィルム資料収集点数は当初目標の五千点を確実に越える見込みであることが報告された。これを受けて討議が行われ、各委員より、芸能・美術関係資料の調査収集にも努力していることは高く評価するが、客員部門の機能ともあいまっていっ

そうこの方面の拡大に努力すべきこと、個人所蔵のコレクション収集には多くの困難な問題があることを理

解するが、この方面の開拓にもいっそう努力してほしいこと、史料編纂所その他の機関とも情報交換を行い、調査・収集個所を寺社その他、さらに開拓してほしいこと等の意見が開陳された。

(二)昭和五十五年度文献資料調査収集計画について

旅費・フィルム価格等の大巾な値上りにもかかわらず予算の延びが抑えられているため、五十五年度の調査・収集目標の達成には多くの困難が予想されること、近代に入ってから

の模写本の類も収集の対象となるが、原本所蔵者との関係に配慮を要すること、事故フィルムの処理はきわめて困難なことなどが述べられ、各委員から、七千点調査・五千点収集を確保するためには予算上の裏づけが不可欠で、館としてそのための努力をすべきこと、事故フィルムについては専門の検取担当官が配属されている機関においても、撮影ミスを完全に防止することは不可能なのが実状であり、発見された場合に個別的な対応をはかる以外に方法はないことが指摘・確認された。

なお、次年度以降、版本収集の方針・国文学周辺資料の取扱い・カラーフィルム撮影の実現・和刻本等の

漢籍資料の収集範囲等を継続議題とすることを決定した。

「調査研究報告」第一号の刊行について

当部において行った調査研究の成果を報告するため、本年度から当部では、「調査研究報告」を、主として部内業務用に刊行し、事業の効率的な進展をはかることとし、五十四年度末その第一号を刊行した。

昭和五十五年度国文学文献資料収集計画委員の委嘱について

本年度の収集計画委員として、再任四名、新任六名、計十名の方々に委嘱し、四月一日付をもって発令された。(別紙名簿参照)

昭和五十五年度国文学文献資料調査員の委嘱について

本年度の文献資料調査員として、北海道・東北地区七名、関東地区二十四名、中部地区十六名、関西地区十一名、中国・四国地区十名、九州地区七名、計七十五名の方々(別紙名簿参照)を委嘱した。ほかに特定事項についての調査・収集に御協力いただくため、特別調査員若干名を委嘱している。

昭和五十五年度第一回国文学文献資料収集計画委員会の開催

五月二十日、当館中会議室におい

て開催、議事は左の如くである。

(一)委員長選出について

委員会規定により野田寿雄委員を委員長に選出した。

(二)昭和五十四年までの文献資料調査・収集状況について

昭和四十七年の当館発足以来、文献資料部において行った文献資料の書誌調査点数、およびマイクロフィルム収集点数は、ほぼ所期の成果を収めることができたが、予算状況等から今後の目標達成はきわめて厳しいことが報告された。

(三)昭和五十五年度の文献資料調査・収集計画について

四十六箇所、約七千七百点の本年度文献資料調査計画と、三十五箇所約五千百点の文献資料収集(撮影)計画が承認された。

(四)今後の調査・収集方針について
各委員から次の如き意見が開陳され、討議された。

(1)国内で未着手、かつ重要な資料を有する文庫等の発掘にさらに努力してほしい。

(2)丁とばし等の撮影ミスは不可避であり、検収段階での発見も至難であることが指摘確認され、事後に発見された場合の対処の方法が今後の課題であるとの結論に達した。

(3)カラーフィルムの性能は著しく高まっているので、絵本・絵巻等については、速やかにカラーフィルム撮影を実現してほしいとの一致した要望がなされた。

(4)海外国文学文献資料の調査・収集は、当館の使命からも速やかに実現する必要があるという結論に達し、今後重要な課題として前向きに検討することとなった。

(5)予算その他の厳しい制約があることは理解できるが、当館設立の主旨に照らして内外の貴重資料の調査・収集にさらに努力してほしいとの一致した要望があった。

国文学文献資料調査委員会(総会)の開催

五月二十七日、当館大会議室において開催、昭和五十五年度の文献資料調査収集計画とその方法を中心に討議が行われ、本年度改訂された文献資料調査カードと国文学文献資料調査要領の説明が行われた。総会終了後、さらに地区別・文庫別に、調査・収集についての具体的な打合せを行い、総会終了後、調査員による調査・収集のための活動が着々と進められて現在に至っている。

(文献資料部長)

(文献資料部長、大久保正教授は、

昭和五十五年九月一日御急逝になりました。謹んで哀悼の意を表し巻末に高野山東京別院での葬儀

新収資料紹介 ⑮

羅生門 絵巻 二巻

中世小説。武家物語。渡辺綱が次木童子の右腕を斬り落し、老母に化けた童子に奪還せよとするとするが名剣鋭切でその首を打落した。謡曲「羅生門」の影響作とされる。伝本は数本あり、絵巻が多い。

当館収蔵品は江戸前中期の制作。

題簽「羅生門物語上(下)」。紺地

鳳凰に牡丹唐草金欄表紙。見返金布

目紙。縦三〇、八横上巻二九紙一

三米八四横、下巻二七紙一三米三三

横。字高二七横。用紙は上質鳥の子

紙、金泥下絵。絵は各巻五図。第一

図が二紙を継ぎ合わせ(七六、二横)

た他は各一紙(三八、五一五〇、三

横、本文は五一―五三横)。下巻末尾

に「市丞朝倉氏重賢書之」と本文と

同筆にて記す。伝記未詳。絵は狩野

派風。金泥を多用し、棚飾り用の豪

華本であるが、人物と背景は画者を

異にするなど、いわゆる工房的制作

にかかるとあり、他本、例えば

「図説日本の古典、御伽草子」(集英社版)所載の個人蔵絵巻の絵に比す

における弔辞、略歴、御著書等を掲載いたします)

れば人物の数など全体に簡略化された構図である。絵柄は同本とも大通寺藏奈良絵本とも位置・構図ともに相違する。本文は他の翻刻された本文(東洋大学蔵絵巻・大通寺蔵本)と比較すると相互に誤脱がある。ただし諸本を通じて本文上の大差はない。なお、上巻は「いへのてうほうなれともなんちにあつくるなりとてかのひけきりといふたちをそ給はりける」で終える。桐葉箱(縦三七、九横、横一八、二横、高一〇、六横)入り。箱書「羅生門物語 式巻」。蓋裏に「此羅生門巻物之筆者市丞朝倉重賢トアリ/田藤藏スル古今和歌集ニ(同筆ニ見ユル)天文三年七月二十日功守桑門兼純トアリ/然レハ重賢ハ在俗ノ名ニテ兼純ハ老年入道ノ名歟/松尾村貴舟神社ノ画巻物モ此同筆ニ相違ナシ/弘化四年未三月/田林」とある。もとより謬説である。箱の底裏に「此主田林斧吉」とある。松尾村は山形県東田川郡羽黒町松尾か。

(村上学)

研究情報部事業報告

古川 清彦

第四回国際日本文学研究集會は、ほぼ例年通り行う予定で準備中である。「館報」、「紀要」、「国文学年鑑」の刊行も従来通りにする。情報処理システムの開発、研究報告書の作成、昭和三十七年以前研究文献の調査・収集・刊行事業(五ヶ年計画の第二年)等も主な事業である。以下各室毎に状況を報告する。

(1)情報室。昨年度実施した昭和三十七年以前を中心とした学会誌・紀要のバックナンバーの調査については、別稿で報告したように、多くの機関の御協力により、今後の入手のための貴重な情報と多数の御寄贈とをいただいた。厚くお礼申し上げる。

新聞情報については、昭和五十四年度の「国文学年鑑」から、従来の学会消息データのほか、署名論文(時評は除く)も掲載することとし、準備中である。

(2)編集室。昭和五十三年分「国文学年鑑」を五十五年三月末日に刊行した。また「国文学研究資料館紀要」

第六号も三月末に刊行できた。昭和五十五年度はそれぞれの次号を編集刊行する。年鑑の五十四年分には新たに新聞の国文学関係記事の一覧と、雑誌・単行本の資料館所蔵の有無の注記の二点が新たに付け加えられる。紀要七号も三月末刊行の予定である。臨時事業としての昭和三十七年以前国文学関係論文目録作成の仕事は、コンピュータに入力するためのデータ作成を八月一日から開始した。この仕事は編集室が担当しており、年間約二万件の論文カードを作成する予定である。なお、四月一日付で転出の和田博通助手の後任として同日付で平沢龍介助手が着任した。

(3)情報処理室。当館のシステム開発の報告として、三月に「国文学研究資料館報告」の第5号「逐次刊行物目録システム(整理閲覧室と共同)」、第6号「データ処理用漢字辞書」を刊行した。

今年度は経常的な、マイクロ資料目録作成、逐次刊行物目録の作成、資料

- 管理等の事業のためのシステムの運用を継続するほか、システム開発として、
- ①逐次刊行物目録の英文出力処理の改善(ピッチ処理)
- ②昭和三十七年以前の論文目録の出力部の開発
- ③データベース・マネージメント・システム(DBMS)の開発
- ④語彙検索システムの開発

整理閲覧部事業報告

本田 康雄

- ⑤漢字辞書の整備
 - 等昨年度から引きつづき実施しているものの完成を目指すほか、
 - ⑥古書目録作成システムの設計を開始し、また、計算機システムの拡張についても検討を行っている。
- なお四月一日付で内藤衛亮・宮沢彰尚助手は助教に昇任した。(研究情報部長)

昭和五十四年度もさいわい多くの成果をあげることができた。整理閲覧室の「マイクロ資料目録」等、目録作成作業は順調に進み、また参考室は夏期公開講演会(三日間連続)の内容を新しく「講演集」として刊行し、その業務の充実に力を注いだ。

ところで、新年度(昭和五十五年)から、もう一つの重要な事業が始まった。古典籍総合目録作成事業と呼ばれる。これは、「国書総目録」(岩波書店刊)と同種の企画で、その改訂及び増補を当館で行おうという意図である。但し、この総合目録は、多様な利用

を可能にし、かつまた目録の維持・管理(恒常的増補・修正)のために電算機を利用した古典籍総合目録データベースとして形成されるものである。

以下、当部における昭和五十五年一月より六月までの各室の事業状況を報告する。

(一)整理閲覧室

例年のことだが、年度末になると目録等が最終的に電算機から打ちされ、それを印刷し、刊行することになる。昭和五十四年度も「マイクロ資料目録(昭和54年)」(第3冊)と「逐次刊行

物目録(昭和55年、第3版)が出揃った。また、文献資料(テキスト)のうち、当館が原本を所蔵しているものの冊子体目録については以前、簡略目録(昭和五十二年一月、館報別冊1号)を刊行したが、これも「マイクロ資料目録」と同様に電算機処理で刊行していくため、一、二〇〇件ほどデータ作成を行い、新年度からマイクロ資料作成システムを改訂してこの原本(古書)を含めた文献資料書誌システムをつくるべく設計に入った(研究情報部情報処理室と協力)。

以下新しい古典籍総合目録の業務を加えて業務項目ごとに進捗状況を述べる。

(1) 受入業務。昭和五十四年度はマイクロ資料(フィルム三、七五九リール、フィッシュ五〇三枚、紙焼写真三、六〇四冊)、図書(三、七九一冊)、逐次刊行物(一、二二六誌)、その他の資料を受入れた。逐次刊行物目録は約二、〇〇〇誌を収録した。
(2) 整理業務。昭和五十四年度前半に業務のスピード・アップをはかり、下半期に入って先にも述べた原本(古書)の書誌データの作成を行った。(この目録ができるまでは従来通りカード体目録によって検索できる。)「マイクロ資料目録」作成の作業は

順調で昭和五五年度の刊行分のデータ入力についてもすでに六、〇五九件(七月一日現在)を行った。

なお昭和五十四年度貴重書指定小委員会会で、「萬葉類葉抄」、「住吉物語」が指定され、特別コレクション「国学者等自筆本」に「天保千首和歌」(福田美穂)、「古言抄」(五十音霊名并ニ本義)が加えられた。

(3) 閲覧業務。資料の利用の伸びは、ひきつづき順調である。とりわけ、複写サーヴィスは昭和五三年度の二七六四件に比して昭和五十四年度は五〇九七件に増加した。「大学図書館の文献複写受付・依頼の状況」という調査結果(「図書館雑誌」Vol.74, No.3)に照らし合せてみると、当館の場合この数字がほとんど館外からの申し込みであるので、当館から外への申し込みを含めて数字の調整をすると約五、一〇〇件程度で全国第一二位くらいになる。この調査統計に実は若干の問題があるのだが、それにしても開館してから三年になり、共同利用機関として先ず十分に役割を果たしているといえるのではなからうか。

(4) 古典籍総合目録担当。日本人の著作に係る(慶応三年までに成立したもの)全図書の総合目録を作成

するというこの事業は、昭和五五年から始まる一〇か年計画(予算計画)の新規事業である。第一年度の本年度については、基本計画の策定、データベース・システムのデザイン、さらに作業計画や作業基準等を作成するが、この事業の規模、性格から

みて、関係各方面の御意見や御協力をいただくべく古典籍総合目録委員会をつくり、そこで基本計画について審議して戴く予定であり、また館内に専門委員会を設置した。整理閲覧室担当としては、四月より「国書総目録」の分析や所蔵者調査、所蔵目録の調査などの準備作業を進めており、委員会開催に向けて努力している。

なお、三月三十一日付で石塚誠事務官が辞職し、四月一日から整理係に鈴木康生事務官が着任した。

(二) 参考室
参考質問の受付・回答に従事し、前期に引き続き参考図書充実、参考閲覧室の整備に努めた。参考用資料の作成に関しては、「館蔵を中心とした索引書類リスト」(参考書誌蔵刊2)を印刷し(三月)、「漢籍類書項目索引」(鑑刻・複製作品目録)について作業中である。

国文学の普及業務として、①第十

二回公開講演会を六月十四日(土)に開催した。演題、講師は左の通りである。

「読本では何が面白い」 京都大学教授、浜田啓介氏
「日本の幽霊」 早稲田大学名誉教授、陣岐康隆氏

なお、昨夏の第二回夏期公開講演会(三日間連続)の筆録である「日本の説話―ハナシの世界―」(国文学研究資料館講演集1)を刊行した。これは当館の講演集の創刊であり、今後も毎年、刊行する予定である。

②展示は常設展示「古典文学その流れ―源氏物語・百人一首・水滸伝など―」(一月十日―四月十二日)、「徒然草」(四月二十三日―六月二十八日)、また中世文学会の当館見学に際して「中世文学小展示」(五月二十六日)を開催した。

(整理閲覧部長)

国文学研究資料館講演集1「日本の説話―ハナシの世界―」参考室編、昭55・3。昭和54年の夏期連続講演会の筆録集。講師は、今野達、西尾光一、村上学、宗政五十緒、大島建彦、神田秀夫の諸氏。御希望の方は参考室カウンターにて配付。

利用者へのお知らせ

一 相互協力について

国立の大学共同利用機関として、当館では、全国の国文学研究者へ均等に便宜をはかるべく、広く他の類縁機関との間で相互協力活動（図書館や文庫等の機関同士が、資料の収集、処理、提供等において相互に協力しあうことにより、個別機関内での、利用者に対するサービス能力の不足を補うこと）を積極的に推進しています。対象となる機関は次の通りです。

- (1) 国立学校設置法又は学校教育法の規定に基づく大学等の図書館又は研究所
- (2) 国立又は公立の調査研究機関

又はこれに準ずる機関

- (3) 図書館法の規定に基づく図書館、文庫又はこれに準ずる機関
- (4) その他館長が適当と認める機関

（当館「利用規程」第34条）

例えば、(1)の大学等に所属する教員、学生等で、当館所蔵の資料が必要である場合、その図書館に当館との相互協力の申し込みを行えば、次のサービスが受けられます。

- (1) 複写（活字本の電子複写・和装

本の紙焼写真・サービス区分上複写サービスのできるマイクロ資料からのリーダープリンター複写、ポジフィルム複製、紙焼写真）

(2) 貸出（貴重書、参考図書、損傷しやすい図書を除く図書及びマイクロ資料中原資料所蔵機関から複写が許可されている紙焼本・一機関につき10点または15冊以内・期間は発送日、返納日を含め31日間）

要するに、地理的な制約や多忙などの事情で、直接当館へ出向いて利用する機会をもつことが困難な人も、所属機関を通じ、来館者同様のサービスを享受できるわけです。また、そのためにもマイクロ資料目録、逐次刊行物目録はできるだけ各機関に配布しています。

具体的な手続として、まず依頼者は当館所蔵資料を利用したい旨その所属機関（図書館）へ申し込みそれを承けて機関（図書館）から当館へ正式の複写依頼ないし借用依頼が送付されます。資料の借用は無料、郵送料だけが借受館の負担となります。複写の場合は、複写料金（及び

郵送料）が必要であり、その請求は、受付後納入告知書の発送により行います。

相互協力による、特に複写受付の件数は年ごとに伸びています。学術情報資源は研究者が共同で利用すべき財産であるとの認識に基づき、相互協力による利用がさらに活発になることは当館としても大いに歓迎するところです。

二 その都度所蔵機関への許可申請を必要とするマイクロ資料の複製サービスについて（サービス区分C・D）

撮影収集したマイクロ資料の閲覧、複写等のサービスは、原資料所蔵機関と当館との申し合せにより行っており、その申し合せの内容を当館ではAからEまでのサービス区分として原則的には原資料所蔵機関ごとに分類しています。そのうち、その都度事前許可が必要なCとDのサービス区分の資料の複製（ポジフィルム、紙焼写真等）申込の手続に関し、原資料所蔵機関宛ての複製許可願の様式が改正されました。新様式は、(1) サービス区分C・D資料の複製許可願、(2) 資料複製許可願、(3) 資料複製許可書からなる三枚一組（カーボン付）となっています。従来のものは

(1)がなく、(2)と(3)が一枚になった様式でした。申込者は(1)に必要事項を記入し、それをもとに当館は(2)及び(3)を原資料所蔵機関宛てに送付します。その後(3)が返送され、許可が下りた時点ではじめて、複写申込を正式に受け付けることとなります。

(2)の複製許可願を送付してから、(3)の複製許可書が届くまでおよそ一週間程度です。

「マイクロ資料目録」には作品ごとにサービス区分が付されていますので、複写したい作品がCあるいはDであったときは、以上のことを御含みおき下さい。

国文学年鑑（昭和53年）
昭和五十五年三月二十五日発行
〔内容〕

- ・ 学界展望
- ・ 雑誌紀要論文目録
- ・ 単行本解説
- ・ 学会消息（学会一覽・学会研究発表一覽・新指定文化財目録・科学研究費等交付一覽・受賞一覽・訃報）
- ・ 索引（執筆者索引など五種の索引を付す）
- ・ 一部市販



故 大久保正教授 略歴

- 大正八年九月二十一日生
- 昭一八年九月 東京帝国大学文学部 国文学科卒
- 昭二一年四月 帝国女子専門学校講師
- 昭二二年四月 東京高等学校講師
- 昭二四年九月 文部教官東京外国語大学東京外事専門学 校教授
- 昭二六年三月 東京外国語大学助教
- 昭三三年八月 北海道大学助教授

弔 辞

謹んで故文献資料部長、大久保正教授の御霊前に申し上げます。
 あなたは越後に祖父、父君、二代育英の名門に生まれ、新潟高校を経て、東大国文学科を卒業、久松博士門下の俊秀として、つとに万葉学、本居学に輝いた数々の業績を挙げられました。東大国文学研究室、東京外国語大学、北海道大学等に職を奉じ、国文学研究資料館の創設と共に着任、同僚に率先してよく市古館長を補佐し、終始その命にもとることなく、資料館の中心人物として盡力、館の礎を固く築かれました。性豪放にして緻密、学徳圓滿、敷島の道に長じ、研究と業務に精勵、衆の模範と慕われました。
 しかるに突然その訃を聞いて、館内一同肅然、まことに秋風吹いて大樹倒るの感に堪えません。御遺影を仰ぎ、御遺志を偲ぶ時、私共は徒らに悲しみにふけることなく、共同利用機関の使命に協力一致邁進いたしたく存じます。謹んで御冥福を祈り、館の弔辞といたす次第であります。

国文学研究資料館 研究情報部長 古川清彦

- 昭四一年八月 同教授
- 昭四七年六月 国文学研究資料館教授 文献資料部長
- 昭五五年九月一日 逝去
- 正四位勲三等(旭日中綬章)に叙せらる
- 故 大久保正教授 著書
- 本居宣長の万葉学(昭二二年)大八洲 出版社
- 隠岐本新古今和歌集(昭二四年)古典 文庫
- 万葉の伝統(昭三三年)塙書房
- 江戸時代の国学(昭三八年)至文堂
- 上代日本文学概説(昭三八年)秀英出版社
- 万葉集の諸相(昭五五年)明治書院
- 編著
- 「本居宣長全集」△一〇、別巻二
- (昭四三年、五二年)筑摩書房
- 「日本文学全史」上代編(昭五三年)学燈社
-
- 外国人研究員(各員教授)
- コレージュ・ド・フランス教授
- ベルナル・フランク
- 昭和五十五年八月十五日—十二月十四日
- 訃報 当館評議員豊田武東北大学名誉教授は去る三月二十九日御逝去になりました。謹んで哀悼の意を表します。

昭和五十五年九月一日付

文献資料部長事務取扱 市古貞次

評議員会議の開催について

本年度第1回評議員会議が七月十八日(金)に当館中会議室において、16名の評議員の出席を得て開催され、石井良助氏が議長に、松尾聰氏が議長代理となった。議事は管理運営の概況、昭和56年度概算要求及び昭和55年度事業等について評議が行われた。なお、部会の構成は次のとおり決定した。

国文学研究資料館評議員

会議部会別名簿

- 国文学部会
- 阿部秋生
- 石井良助
- 伊地知鐵男
- △白田甚五郎
- 児玉幸多
- 小田切 進
- 小林清治
- 久首神 昇
- 斎藤 正
- △野間光辰
- △佐藤喜代治
- 秀村選三
- 谷山 茂
- 古島敏雄
- 手塚富雄
- 宝月圭吾
- △野間光辰
- 松田智雄
- ◎松尾 聰
- 山本達郎
- ◎印は部会長。○印は部会長代理。
- (注)△印は両部会を兼る者。

昭和五十五年秋季学会開催一覽

情報室

国語国文学会連絡協議会に参加する学会の秋季大会予定は次のとおりである。学会配列は五十音順、以下①事務局②大会開催日③会場の順。

- 解釈学会①千一七〇豊島区北大塚三
 一 二九一教育出版センター内②
 八月二二日③国立教育会館
- 近代語学会①千一五四世田谷区太子
 堂一七昭和女子大学内
- 国語学会①千一〇一十代田区神田錦
 町三一―一武蔵野書院内②一〇月
 二五―二六日③信州大学(松本)
- 古事記学会①千一五〇渋谷区東四―
 一〇一八国学院大学日本文化研
 究所第六研究室②予定なし
- 古代文学会①千一七三板橋区双葉町
 四一―一九古橋信孝方②一〇月四日
 (二五〇回記念例会)③東京教育
 会館
- 上代文学会①千一〇一十代田区神田
 神保町三一―二七共立女子大学芸
 学部日本文学研究室②予定なし
- 脱話文学会①千一〇二千代田区三番
 町六二松学舎大学文学部国文学
- 科貴志研究室②二月七日③龍
 谷大学(但し地方例会)
- 全国国語国文学会①千二一四川
 崎市多摩区生田四七六四専修大学
 文学部国文学科研究室②一〇月
 一八―二〇日③金沢大学
- 中古文学会①千六五八神戸市東灘区
 森北町六一―二三甲南女子大学
 文学部国文学研究室②一月八
 日―九日③甲南女子大学
- 中世文学会①千一五四世田谷区駒沢
 一―二二一駒沢大学文学部国文
 学研究室②一〇月二五―二七日
- ③熊本大学
- 日本演劇学会①千一六〇新宿区西早稲
 田一六―一早稲田大学演劇博物館内
 ②一月―三日③大阪芸術大学(二
 二日)京都観世会館(二三日)
- 日本歌謡学会①千一五〇渋谷区東四
 一―一〇一八国学院大学文学部第五
 研究室②一〇月一日―二日
- ③山形大学
- 日本近世文学会①千一〇二千代田区
 三番町二二妻女子大学文学部国文
 学研究室②一月一五―一六日

- ③愛媛大学
- 日本近代文学会①千一六〇新宿区西
 早稲田一六―一早稲田大学教育
 学部一〇二六研究室②一〇月二
 五日―二六日③東京女子大学
- 日本口承文芸学会①千一五〇渋谷区
 東四一〇一―二八国学院大学文学
 部第三研究室内
- 日本文学協会①千一七〇豊島区南大
 塚二一七―一〇②一〇月一八―
 一九日③東京都立大学
- 日本文学風土学会①千一五四世田谷
 区太子堂一七昭和女子大学内②
 一月二九日(公開講演会)③専
 修大学
- 日本文芸研究会①千九八〇仙台市川
 内東北大学文学部国語国文学研究
 室内②一月八日③東北大学
- 俳文学会①千一九二―〇三八王子市
 東中野七四二中央大学文学部三八
 三三三研究室②一〇月一八―二
 〇日③大谷大学
- 表現学会①千四八〇―一一愛知県長
 久手町大字長瀬字片平九愛知淑徳
 大学文学部国文学科研究室②予
 定なし
- 仏教文学会①千一二二文京区白山五
 一―二八―二〇東洋大学短期大学
 日本文学研究室②予定なし
- 万葉学会①千五六四吹田市千里山東

- 三一―三五関西大学文学部国文
 学研究室②一〇月一八―二二日③
 園田学園女子大学
- 美夫君志会①四六六名古屋市中昭和区
 八事本町一〇―一二中央大学文学
 部国文学研究室②予定なし
- 和歌文学会①千一九二―〇三八王子
 市東中野七四二中央大学文学部長
 崎研究室②一〇月一八―二〇日
 ③中央大学(多摩校舎)

館報入手ご希望の方は

郵便番号、あて先、氏名を明記の
 うえ、郵送料(切手)を同封して当館
 情報室あてお申し込み下さい。

国文学研究資料館報 第十五号
 昭和五十五年九月発行
 編集・発行者
 国文学研究資料館
 東京都品川区豊町一六二一〇
 郵便番号 一四二一
 電話(七八五)七三二(代)
 印刷所 株式会社 三興